



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

デフォー

ロビンソン・クルーソー  
の生涯と冒険 ペスト

スウィフト

ガリヴァ旅行記

---

中野好夫・平井正穂訳

世界文学大系

15

筑摩書房版

世界文学大系 15

---

デ フ ォ ー  
ス ウ ィ フ ト



---

昭和34年6月5日発行

定価 450 円

|       |              |
|-------|--------------|
| 訳 者   | 平 井 正 穂      |
|       | 中 野 好 夫      |
| 発 行 者 | 古 田 晁        |
| 印 刷 者 | 山 元 正 宜      |
| 発 行 所 | 株式会社 筑 摩 書 房 |

東京都千代田区神田小川町2の8  
振替東京 165768 電話(29)局7651

---

## 目次

デフォー

平井正穂訳

ロビンソン・クルーソーの  
生涯と冒険

ペスト

173 5

スウィフト

中野好夫訳

ガリヴァ旅行記

327

装  
幀  
庫  
田  
發

デ  
フ  
ォ  
ー



## ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険

私は一六三二年、ヨーク市に生まれたが、良家の出だった。といっても代々この国の者であったわけではなかった。私の父はブレイメン生れの外国人で、初めはハルに住んでいた人間だったからである。父は貿易で一儲けしてから、商売をやめ、やがてヨークに住みついたのだった。そしてこの町の出身である私の母と結婚したという次第だ。母の実家はロビンソンといい、土地の名望家であった。そういうわけで私は初めロビンソン・クロイツナーエルとよばれていたが、イギリスによくある訛りのおかげで今ではクルーソーとわれわれ一家のものはよばれるようになった。いや、自分でそうよびもし、署名もするようになった。むしろ、仲間の連中も私をそうよんでいた。

兄が二人いた。一人は陸軍の中佐で、以前例の有名なロスカート大佐が指揮していたフランダース派遣のイギリス歩兵連隊に所属していたが、ダンケルクの近くでスペイン軍と戦って戦死した。二番目の兄はどうなったのか、私はなんにも知らない。私自身がどうなったのか、父

や母が知らなかったのと、その点まったく同じだったといえる。

三男坊ではあるし、これといった仕事を身につけたわけでもないし、というわけで、ずいぶんと早くから私は放浪癖にとりつかれていた。昔氣質の父のおかげで一と通りの学問はさせられていた。といっても家庭教育や、田舎の月謝のいらない学校で受けられるくらいのものであったが、父はそれでも私を法律家にするつもりでいた。しかし、私は是が非でも船乗りにならなければぜったいに満足しなかった。こういう気持が父の意志、いや、父の命令と正面から衝突したことはいうまでもなかった。母やほかの友人たちの願いや説得とも衝突したこともむしろあった。こういうもって生まれた性分の中には、悲惨な生涯と直結する、何か運命みたいなものがあるらしかった。事実、そういう悲惨な生涯に私はやがて見舞われもしたのだった。

まじめで分別者の父は、私の計画をはっきり見ぬいて、いろいろ警告を発してくれたが、それは何とも切々と心にしみるものであった。痛風でとじこもったきりの自分の部屋に、ある朝彼は私をよんだ。そして、この問題についてこんこんと説諭してくれた。どんな因果で親の家を飛び出し、生れ故郷を捨てなければならぬのか。要するにくだらない放浪癖にとりつかれているにすぎないではないか、という調子であった。このままでも、立派に世間にも出られるし、勤勉と努力しだいでは身代をきずくのも思

いのままだし、第一安楽な生活もたのしくおくれるではないか。父はまたこうもいった。外国にいつて一と旗あげ、尋常一様でない仕事をやって名前をあげようなんていう連中は、どんな底生活にあえいでいるような連中か、さもなければ、有封にいった、金と運に恵まれた連中かのどちらかなのだ。こういうことはお前などのとうてい企て及ぶことでないことだし、また他方からいえばそこまで身をおとすまでもないことなのだ。つまり、お前の身分は中位の身分である。自分の長年の経験によるとこのくらいいい身分はないし、人間の幸福にも一番びつたりあってもいる。自分の卑しい連中の惨めさ苦しき、血のにじむような辛酸を嘗める必要もない。身分の高い連中につきものの驕りや贅沢や野心や妬みになやまされる必要もない。こういう中位の立場がどんなに幸福なものか、ほかの連中がどれほど羨ましがっているかということを考えてみればわかりそうなものだ。権勢の地位に生まれついたらばかりに古来どれほどの悲哀を嘆いてきた王者の多かったことか。二つの極端の、つまり貴賤の中間に生まれしならば、と願ったことか。貧も富もさけたいと願った賢者は、中位の身分こそほんとうな幸福の基準であることを証したということができる、——こんなふうには父はいうのだった。

よく見てみるがいい、と父はいった。人生の災をしょっているのは社会の上流と下流の者



に限られている。中位の者はほとんど災難らしい災難は受けることはないし、上下の者たちのように、人生の浮沈に苦しめられることもないのだ。いや、心身の不安や苦悩にさらされることもない。ところが、あの連中ときたらどうだ。一方では、淫らで、贅沢で、無軌道な生活がたりたり、かと思うともう一方では烈しい労働や貧乏な生活、ほとんど喰うや喰わずの生活がたたる、というわけで、こういう生活のゆきつとところは当然心身の異状ということになる。中位の生活はまさにあらゆる美德、あらゆる喜びの源泉といえる。このちやうど頃合いの幸運にみせずくものはいわば平和と豊かさという侍女だ。また、ここにはさまざまな祝福がある。たとえば、節制や中庸や平靜や健康や社交が、またあらゆる快い娯楽、あらゆる快的な慰安がある。こうやってこそ、人間は静かに穏やかに世間をわたってゆき、また気持よく世間に暇を告げることが出来る。肉体や頭脳の重労働に悩まされることもなく、また日々の糧をうるために奴隷の生涯に自らを売りわたす必要もなく、魂の平和を奪い、肉体の安らかさを奪う苦しい生活にあえぐこともなからう。嫉視羨望の念に苛まれることも、偉いことをのぞむ野心にひそかに身を焦がすこともなからう。あるものはただ、安らかな生活をいとなみながら静かに世の中をわたってゆくということ、辛酸とはおおよそ遠い、実に生きることの喜びをしみじみと味わいつつ、人生の幸福にひたり、一日一日と経験を重ねる

にしたがって一層しみじみとそのことを感ずるにいたるということ、このことなのだ。

こんなことをいったあとで父はあふれでるような親身の情を示しながら、若い者にありがちな血気の勇にはやるのはやめてくれ、と私に頼むのだった。そんな悲惨な目に自分から飛びこむなんて物好きにもほどがある、神様だって、おゆるにはなるまい。第一自分の生まれついた境遇だって考えてみるがいい。何も自ら汗を流してパンを求める必要はないではないか。何かとお前のために世話してやろう。今も今いつてたような身分相応なほどよい生活をうまくやってゆけるように骨もおつてやろう。それでも、どうしてもそんな生活が面白くない、幸福でないというのであれば、その原因はお前の罪かもしれないぬ。まったくの話が、運命かもしれないぬ。こうやって、災難がふりかかるのが目のみるより明らかなのを、これほど口をすっぱくして説いたのだ。親としての義務はこれで充分果したのだ。わしにはもう責任はない。つまりだ、わしがいうとおり家に残って生業にいそむということであれば、いろいろな面倒もみてやろう。が、どうしても出てゆくということであれば、それを勧めるような、そんなお前の不幸に力をかすような真似はできない。そんなことをいったあとで、最後に父がいったことはこうだった。お前の兄がいい見本だ。低地方戦争へ行くのをやめてくれとお前の場合と同様、どれくらい頼んだかしれやしない。それでもいうこと

をきかなかった。若い血の沸けるにまかせて軍隊にはいり、結局戦死してしまった。お前のために祈ることをやめるとはいわぬが、このような馬鹿な真似をする限り、神様の祝福を受けようなんてことは当てにしないがよろう。あとになつてわしの忠告を馬鹿にしたことを後悔する日がかならず来る。もうその時は今さら誰かにたよってどうにかなるものでもないのだ。

父のこの話の終りのところは父自身は気がつかなかったらうが、実に予言的というほかなかった。話がこままでくるとその眼からは涙がはらはらと流れるのを私は見た。とくに、戦死した兄のことを話す時なぞはひどかった。そのうちに、孤立無援、一人ぼっちになつてきつと後悔する時がくる、という時なぞは、父自身、胸が迫つたらしく言葉がとぎれたほどだった。そして、胸がいっぱいでもうこれ以上一と言もない、と父はいうのだった。

父のこの訓戒はひしひしと身にこたえた。これが身にこたえない人間はよほどどうかしているというほかはない。もう外国へゆくことは考えないことにした。父の希望どおり、家におちつくことに決心した。ところが、万事休す！二、三日でこの決心も煙のように消えてしまったのだ。つまり、これ以上また父にくどくど説かれるのも本意でないから、こっそり家から抜け出そうと、二、三週間後には心にきめたわけであった。かといって、いくら決心はしたものの、その興奮にかられてそそくさと家出をした

わけではけつしてなかった。不断よりはいくらか機嫌のよい頃合いを見計らって、母に打ち明けてみた。世界をみなくてはどうしても気がすまない、よしんば何か仕事につくにしてもとんとままでやりとげる自信はない。だから、お父さんの承諾なしでも家を出ようというのだから、いっそのこと思いきってお父さんも承諾したらどうだろうか。私ももう十八になった。いまさら商人のところへ奉公にゆく年でもないし、弁護士<sup>ロバート</sup>の書生になる年でもない。たとえそういう所へいったところで年季がつとまるわけではぜったいにないし、年季があける前に主人のところから飛び出して船乗りになるのはきまつている。たった一と航海だけでいいのだから、それを許してくれるようにお父さんに頼んでは貰えないだろうか。そのかわりに無事家に帰ってき、航海も好きでないといいことがわかったら、二倍も三倍も働いて留守<sup>留守</sup>のあいだの償い<sup>おご</sup>をする。しかと約束する。と、まあこんなふうに私は母に話した。

母はすっかり怒ってしまった。こんなことでお父さんに話ししようたって何の役にたつものかね、お前の考えはもうちゃんと知っておいでなのだから、お前の身のためにならないことを許して下さるわけはないよ、と母はいった。母も知っていたのだが、父のああいう話、心から子<sup>こ</sup>を思う親の情のあふれたああいう話を聞いたあとで、またすぐ臆面もなく家を出ることを考えるというのが母には理解できないようであっ

た。どうしても身を亡ぼしたいのなら、どうしようもないことですと母はいうのだった。両親の承諾がえられそうにないこともわかった。母にしても、私の身の破滅になることに力をかすわけにはいかなかったし、父が反対しているのに母に無理に賛成してもらうことも無理だとうかった。

母は父にとりつぐのを断ったのだが、のちになってわかったことは、話の一開始を終を告げていることだった。ひどく心配そうなようすを示したあげく、嘆息をつきながら父はこういってという。「あの子も家におれば何とか仕合せになれるでしょうが、外国に行つたんじゃ疎<sup>そ</sup>なことはあるまい。うんといえるものか」

このことがあつてからまる一年もたたないころであつた。ついに私は家出をしたのだ。それまでのほぼ一年間というものの、定業につけという話にはまったく耳もかさなかつた。生れつきの性分だから私にはどうしようもないことを知っているくせに、私の外国行きを頑固に反対する両親とはしばしば口喧嘩もした。だがある日のことだった。私はハルにぶらつと出かけた。もちろん、その時、家出をする気なぞ毛頭なかつた。はつきりいうが、ただぼんやりそこに行つた時、父親の持船で海路ロンドンにゆくという一人の友人にあつた。いっしょに来ないかという話であつた。船乗りらしいいかにもさつくばらんなすめ方で、つまり船賃はただにしていやるということだった。父にも母にもはや

相談することもなかつた。伝言一つさえ残さなかつた。おそらく事の次第を伝え聞いてくれればそれで充分だと思つた。かくて、神の祝福も、父の祝福も受けず、今の事情がどうの、さきの結果がどうの、そういつたことはいっさいお構いなしに、ロンドン行きの船に乗り込んだのが運のつきというか、忘れもしない一六五一年九月一日のことであつた。世の中には不運に見舞われた若い冒険家も多いが、私はど不運に見舞われるのも早く、また永々といつまでも見舞われどおしだったという例もなからう。ハンバー河<sup>（ハル港はこの河に近くにある）</sup>を出るやいなや風が吹きだした。波がゾツとするくらい高く打寄せ始めた。何しろこれが初めての航海というわけで、ひどい酔いで生きた心持もしないという有様だ。今までの自分の所業を真剣に考え始めた。父の家を捨て義務をすつぽぬかしたために天罰ができめんにくだったと思つた。両親の忠告、父の涙、母の切なる願い、などが今さらのようになまなましく蘇<sup>よみがえ</sup>ってきた。何しろ今とちがつてまだ純真な良心の持主だったので、忠告を無視したことや神と父への義務を怠つたことなどが私の心をひどく苦しめた。

その間じゅう、嵐は激しくなる一方で、初めて私が航海というものを味わつた海はいよいよ荒れ狂つた。こんな時化<sup>しげ</sup>はその後何べんも逢つた時化に比べれば大したものではなく、とくにこの数日後にあつた時化とは全然問題にもならないものだった。しかし、それでも、まだ海にな

れず、何が何だかわからない若造の船乗りにとつては氣も動転するばかりだった。ひと波ごとに船が呑みこまれはしないかとらはらした。波くぼというか波底というかしらないが船がぐつと落ちこんでゆくたびに、二度と浮かび上がることはできないのではないかと観念した。苦しまぎれにさんざん誓いも立てたし、決心もした。もし神の思召<sup>しめい</sup>しでこの航海で命拾いができ、陸地に上がることができたら、私はまっすぐ父のもとへ飛んで帰り、生涯二度と船には足をふみ入れまい。父の忠告をよく聞いて、もうこれ以上こんな辛い目に逢わないようにしようという決心をした。中位の生活状態についての父の言いが正しいのも明瞭だった。父が生涯を通じて平穩無事な生活をおくってきたことも、海上の難にも地上の災にもあわなかったことも、つくづく思いあわされた。私は聖書の放蕩息子と同様、心から前非を悔いてわが家の父のもとへ帰ろうと決心した。

こんな殊勝な考えがつづいたのも、嵐が吹きすさんでいるあいだだけであった。いや、もう少しつづいたかもしれないかった。しかし、翌日には風がやみ、海が少し風いだ。私は少し海になれてきた。それでもその日一日じゅう、まだ少し船酔いのせいもあって、神妙にしていた。だが、黄昏時になるにしたがって空は晴天になり、風はまったく静まった。魅せられるような晴れわたった夕暮であった。くつきりと鮮かに夕陽は沈んでいった。翌朝の日の出もまた鮮かなものであった。風はほとんどなく、海面は油を流したようであった。太陽がその上を照らしていた。こんな美しい光景がまたとあらうか、と私は思った。

前の晩は、ぐっすり眠っていた。もう船酔いもまったくなく、気分はなほだ爽快で、昨日まであんなに恐ろしくいら荒れ狂っていた海が、ほんのちよつとの間にこんなに穏やかな、気持ちのいいものになれるものと、まるで嘘のように思えた。私の殊勝な決心をぐらつかせないではおくものかとばかり、例の、言葉たくみに誘ってくれた友人がやってきて肩をたたいていった。「どうだい、ポップ。ご機嫌はどうかね。ゆんべは大部分参ったんじゃないのか。ちよつと風がざわついたからな、軽風<sup>じやうふう</sup>ってやつだがね」「少しざわついたんだって。冗談<sup>じやうたん</sup>じゃない。おそろしい嵐だったじゃないか」「馬鹿<sup>ばか</sup>だな、嵐だっていいやがる。あれつばちなを嵐だっていうのかい。あんなの全然問題にやならん。船がよくて操船<sup>そうせん</sup>余地<sup>あじ</sup>さえたつぶりありゃあ、ゆんべくらの突風<sup>とつふう</sup>なんざ、平気なんもんさ。しかし、ポップ、君はまだなにしろ新米だからなあ。まあ来いよ。パンチ酒でも作って飲もう。何もかも忘れていい気持だぜ。え、どうだいこの素晴らしい天気は」「私の話のうちでもあまり自慢にもならないこの部分をはしょっていえば、われわれ二人はそれから、すべての船乗りの定石どおり行動したというわけだ。さっそくパンチ酒を作って私はすっかり酔ってしまった。この一と

晩の馬鹿騒ぎで、後悔も、過去の行跡に対する反省も、将来への覚悟のほどもみんな泡のように消え去ってしまった。一言でいえば、嵐が静まって海面が静けさと落着きを取り戻すにつれ、私の心中の嵐も去り、海底に呑まれる恐怖も心配もきれいに忘れてしまい、前々からの欲望がまたぞろ頭をもたげはじめた。困った時に立てた誓いも約束も、さっぱりと忘れてしまった。いかにも、神妙にじつと考えこむ時もあり、深刻な思いにとざされそうになることもあった。そんな時には私はそれをふりきって、病気にでも打ちかつかのように懸命に打ちかとうとした。事実、私は発作<sup>はっさく</sup>とよんでいたのであるが、酒と友人付合いとに自分をまぎらせて、発作のふりかえしを防いだというわけだった。つまり、五、六日のうちには良心に対する完全な勝利をおさめることができた。良心に悩まされてたまるか、という決意をしたどんな若者も、これ以上望みえないというほどの勝利だった。だが私にはまだもう一つ、良心の試煉が残されていたのだった。こういう場合の例にもれず、摂理は私に逃げ口上の余地をまったく残さないつもりらしかった。この嵐で九死に一生をえたことも神の恵みなぞにはよるものか、と考えることも勝手だったが、この次にあった試煉ではどんな非道な荒くれ者の船乗りでも神の恐ろしさと恵み深さとを告白せざるをえないほどのものであった。

航海六日目、われわれはヤーマス錨地<sup>オーマーズ・ヤーマス・アンカージ</sup>（ノール州にある港で、現在はグ）についた。風が向い風で、

天候も静穏であつたので、例の嵐のあと、あまり航程はのびていなかった。ここでわれわれは投錨することになった。一週間あまりも碇泊したであろうか。その間じゅう、風が、つまり東西の風が吹きつづけていたからだ。そのあいだにも続々とニューカッスル（市。昔は石炭をロンドンに出した）からの船がこの錨地に集つてきた。ここはテムズ河を遡るための追風をまつ溜りみたいなものであつた。

しかしながら、風が強く吹いたので仕方なかったといえはそれまでだが、そうでもなかったら、われわれはここにいつまでもぐずぐずせず、河を遡っておくべきであつたと思う。事実、船が碇泊してから四、五日もたつと猛烈な風が吹きだしたのである。それでも、この錨地は港といつてもいいくらい安全な碇泊地と考えられていたし、船がかりはいし、われわれの船の錨などの要具も頑丈だし、というわけで、誰もかも平気なもので危険なぞは全然問題にもしなかつた。そして船乗りらしくのんびりと休息や娯楽に時間を潰していた。ところが八日目の朝になると風は一層烈しくなつた。われわれは総がかりでトップ・マストをおろしたり、準備万端をととのえて、船の碇泊に支障がないようにつとめた。昼ごろには風波はますます荒れ狂い、船は船首を海中につっこみ、何度も波をかぶつた。一、二度船が錨をひきずつたと思つたこともあつた。船長は非常用の錨をおろすことを命じた。その結果、船首の前方に投じた二

本の錨と、ぎりぎりに繰り出された錨鎖で、われわれの船は繫留されることになった。

もうこのころにはもの凄しい嵐となつていた。経験をもつた船員たちでさえ、その顔に恐怖と驚愕の色を浮かべているのが私の眼にとまつた。船の安全のために血眼で奔走している船長も、船長室から出たりはいったりして私の傍を通りながら、低い声でぶつぶつ独り言をくり返していつているのが私にも聞こえた。「もう駄目だ、みんなもう駄目だ、こうなれば神様にお縋りするほかに手はない」などといつていた。この大騒ぎが始まつた最初、私は船尾にあつた自分の室で果然としてじつと横になつていた。その時の気持は今、ちよつと表現できない。今さら前のような後悔をくり返すのも気がひけた。あれほどはつきりと踏み躪り、頑固にも拒けた後悔ではなかつたか。死の苦しみはすでにすぎさつていて、こんどのことも前と同じく大したことはなかつたように思つた。しかし、つい今しがたいうように、船長自身が私の傍を通つて、もうみんな駄目だ、というのを聞いた時には、さすがの私も慄然とした。起きて室から出てゆき周囲を見廻した。その時の光景ほど凄じい光景がまたとあるであろうか。山のような怒濤が三、四秒ごとに嚙みつくようにたたきつけていた。あたり一面、漂っている様相は遭難の一語につきた。近くにもやっていた二艘の船は、荷が重すぎたためマストを切断して海中に投じた。一マイル先きのところで泊っていた一艘の船が浸

水して沈没したことも乗組員が口々に叫ぶ声で知つた。さらにもう二艘が錨をとられ、錨地から沖合へとすすず、べもなく流されていった。しかも、立っているマストは一本もないという有様だ。空荷船はわりに動揺も少なく始末が一番よかった。それでも、二、三艘のそうつた船がわれわれの船のすぐ近くを、追風をうけた第一斜橋帆だけを残して流されていった。

夕方近くなると、航海士と水夫長は前橋を切り倒させてくれと船長に頼んだが、船長は頑として承知しなかつた。もし切り倒さなければ船が沈むという水夫長のたつての抗議で、ついに船長も承諾した。前橋が切り倒された。すると大、橋もぐらぐらしたし、船の動揺が烈しくなつた。やむなく大、橋も切り倒した。甲板には邪魔な橋は一本もなくなつた。

船の経験も浅く、ほんのちよつとした嵐でも以前あれほど竦み上つた私が、この嵐でどんな惨めな思いであつたか、誰でも判断がつこうというものである。あの当時私がどんな気持を味わつていたか、歳月を経た今日正しく伝えられるかどうかかわからないが、前に一度殊勝な覚悟をしながら、またもとの非道な性根に逆もどりをしたという、あのここのために、死の恐怖どころか、その十倍もの恐怖に襲われていたのだつた。この恐怖に加ふるに嵐の凄じさ、その時の私の気持はとも言葉でいいつくせるものではなかつた。だがこれでもまだ最悪の状態ということではなかつた。嵐は依然として荒れ狂つ

た。乗組員たちでもこんなひどい嵐は初めてだというほどだった。頑丈な船だが積荷が重く、そのため怒濤にもまれ、乗組員たちはもう浸水するぞ、といくとなく叫んだ。有難いといえは有難い話だが、彼らにきくまでは浸水の意味が私にはわからなかったのだ。とにかく、嵐は猛烈につづいた。こんなことはめったにないことだろうが、船長や水夫長やその他、乗組員の中でもとくにしっかりと連中までが、祈りをささげ、今にも船が海底に沈むのを恐れているように私はこの眼で見たのだった。真夜中になった。災難また災難とうちつづいた中に、見廻りのため船底に降りていった一人の男が水が洩れているのを発見して大声で怒鳴った。もう一人の男が、船艙にもう四フィートも水がたまっていることを叫んだ。総員ポンプにかかれの命令が出た。その声をきいて私はもう生きた心持はしなかった。それまで腰をかけていた、船室内のベッドのはしに、あおむけにぶっ倒れた。だが、私はすぐ叩き起こされ、今まで何も役にたたなかったが、ポンプをつくらう一人前にできそうなもんだといわれた。私はがばつと起き上るや否や、ポンプのところへ飛んでゆき、命がけで働いた。この作業に夢中になっている時、嵐を乗切ることができず、錨をおぼり出して沖合へ流されてゆく空の石炭船が数艘本船の近くにくるのを船長はみつめた。遭難信号の大砲が発射された。それが何のことか全然わからなかった私は、愕然としてしまつて、船

が折れたかと思つた。とにかくえらいことになったと思つた。ありていにいえば、つまり驚愕のあまり私は気絶してぶっ倒れたのである。自分の命のことで精いっぱいのこととて、私のことを、私がどうかしたかなどということとを、構つてくれる者は一人もいなかった。もう一人の男が代りにポンプに寄つてきて、私が死んだものと思ひ、足で私の体をわきにころがしてどけた。私が気がついたのはかなり後のことであつた。

排水作業はつづけられたが、船艙の水はますますばかりで、沈没はもう明らかであつた。嵐は少し静まつてきたが、港に入港できるまで本船がもつということは到底考えられないことであつた。船長は救助を求める号砲をたえず発しつづけた。暴風をのりきつた、一艘の空船がわれわれの前方にいたが、これが勇敢にも救助のボートを一隻出してくれた。そのボートが本船に近づくとその危なさといつたら並たいていのことではなかった。近づきはしたものの、われわれがそのボートに乗りうつるのも、そのボートが舷側に横づけになるのも不可能であつた。救助の人々はわれわれを助け出すためには自分たちの命も眼中になく、必死にボートを漕いで近づいてきた。そして、結局、われわれは浮標のついた綱を船尾からなげ、それをずっと長くくり出すことにした。彼らは苦心惨憺、危険を冒してその綱をつかまえた。われわれはボートを船尾のすぐ下までたぐり寄せ、一同無事それへ乗り

うつた。さて乗りうつつてはみたものの、ボートの母船に漕ぎよせるなんてことは全然意味をなさないことが、彼らにもわれらにもわかつた。そこで漂うにまかせ、ただできるだけ海岸のほうへ近づけることに衆議一決した。われわれの船長は、もしボートが海岸にのりあげて壊れたら君たちの船長に弁償すると彼らに約束した。こうやって漕いだり流されたりしながらボートはできるだけ陸地に接近しつづ、北へ北へと進み、ウインタントン岬あたりまでいった。

われわれが船から退避してから十五分もたったころ、船が沈んでゆくのがみられた。船の海上における沈没がどういふものか、初めてその時知つた。乗組員が、船が沈むぞ、といつてくれた時も、実はほとんど眼をあげて見ることもできなかったことを白状しなければならぬ。ボートに乗りうつた、いやボートに担ぎこまれた時以来、意気沮喪して死んだも同然であつたからだ。驚愕と恐怖と眼前に迫る事態への不安とで私の心はいっぱいであつたのだ。

こういう有様であつた時も、ずっと乗組員はボートを陸地へ近づけようとして懸命に漕ぎに漕いでいたのだが、ボートが山のような波濤にすうつと乗り上つたさい、陸地の姿が眼にはいって、われわれが海岸に近づいたら早速助けてやろうと、海岸ぞいに走っている多勢の人々の姿が眼に入った。だが海岸にはなかなか近よれず、まして着くなど思いもよらなかった。ウインタントンの燈台もすぎてしまつた。(やがて海岸線は

クロウマールのほうに向つて西に屈折しており、陸地の関係から風の威力もたいぶ殺がれていた。われわれはここでようやく海岸に近づき、苦心の末辛うじて全員無事に上陸することができた。そして、そこから歩いてヤーマスに行った。そこへ着くと、遭難者というわけで町の当局者からも、関係筋の商人や船主たちからも、たいへん鄭重なもてなしをうけた。当局者は結構な宿舎の世話をしてくれた。われわれはまた、ロンドンに行くなりハルに帰るなり、好きなところに行くようにと充分な路銀までも与えられた。

もしこの時分別を働かしてハルに帰り、故郷に帰っていたら、私は幸福になっていたろうと思う。救主イエスの譬話のあの父親そっくりに、私の父も肥えた犢を屠って歓迎してくれたかもしれなかった。私の乗り組んだ船がヤーマス沖の錨地で難破したことを聞いたのち、私が危く溺死を免れたことを多少とはびっくりした情報として知ったのはずっと後のことであつたからだ。

しかし、不気味な運命の力が、もはや私の力ではどうすることもできない恐ろしい勢いで私を押しまくっていた。わが家に帰れ、という理性の声、冷静な判断の叫びを幾度も聞いた。しかし、もはや私は無力であつた。この力を何と呼んだらいいのか、私にはわからない。眼の前に破滅がまぢかまえてくるのに、しかも大きく眼を見開いたままそこへわれわれが突進するとしても、なお、そこに働いているものは、われ

とわが身を破滅にまっしぐらに駆りたてる、あるかくれた、抗し難い宿命の力だというべきか否かも私は知らない。ひとり静かに反省する時には正しい分別も働かないではなかつた。また、初めての試みながら二度までもまごうかたなき教訓を受けたはずであつた。それなのにこれらをむげに退けて私をひたすら反対の方向に、駆つたのは、まさしく、前にのべたような、私につきまとう、定められた不可避な宿命、所詮逃れることのできない不幸な宿命というよりほかにはなかつたと思う。

私の仲間、つまり船長の息子で、さきに私の心をしきりに強情なものにしようとした男はこんどは私以上に弱気だつた。ヤーマスで初めて彼が私に口をきいたのは、町でいくつかの宿舎に分宿していた関係上二、三日後のことだつたが、その時、彼の調子が変つているのに気がついていた。何だか悄然としていて、頭を横にふりながら、どうだい、と私にようすをたずねた。そしてそのあとは彼の父にむかつて私の素姓や、本当はずつと遠い外国に行きたいのだが、ものは試しでこんどの航海に参加したいきざつを説明した。彼の父は私のほうにむかつて、重々しい、深い憂慮をこめた声でいった。「あんたはもう二度と船なんかにはのるんじやないよ。こんどこのことで、船乗りなぞになるものでないってことが、はっきりしたわけだからね」私はいった。「すると船長さんももう航海に出ないんですか」「それは別問題だ」と船長は答えた。「わ

しの職業だし、つまり義務というもんだからね。あんたは試しにこんどの航海に加わつたんだ。だから、強情張つて船乗りなんかになったらどんな目に会うか、だいたいこんどの神様の見せしめでおわかりのはずだ。ひよつとすると、こんどの遭難もあんたのせいかもしれない。タルシ行きの船にのつたヨナのこともある。いったい、あんたという人はどういう人で、なんのために海に出てみようって気になつたのか、一つわけを話して下さらんか」そこで私は自分の身の上をかいつままで話した。話が終るやいなや、船長はたいへんな剣幕で気違いのように怒鳴つた。「わしともあろうものが、何の因果であんたみたいな罰当りな人間を船に乗せたりしたのか、まったくわしにもわからん。千ポンド貰つたて、もう二度とお前さんと同じ船にのるのはまづびらだ！」これは確かに、前にもいったように、正気の沙汰ではなかつた。船を失つたことがまだなまなましく頭にこびりついていて、せいかもしれない。それにしてもずいぶん人を蔑ろにした話だつた。しかし、あとでは、非常にまじめな口調で、親のところへ帰つて、これ以上神を怒らして身の破滅を招かないように、と懇々といましめてくれた。これほどはっきりした天の戒めがまだわからないのか、ともいふた。そして、「まったくの話、家にどうしても帰らんというのであれば、あんたがどこに行きなさろうと災難や絶望がきつとついて廻りますぞ。あんたのお父さんがいわれたとおりきに

つとそのうちになりますぞ」

われわれはまもなく別れた。ろくに彼に返事もしなかった。その後逢わない。どっちへ行つたのかも知らない。私はというと、ポケットにいくらかの金もあったので、陸路ロンドンへ出た。道すがら、今後の身のふり方、家に帰るべきかそれとも航海に出かけるべきか、について内心大いに悶え苦しんだ。ロンドンに着いてからもそれは同様だった。

家に帰ることはいいことに違いなかった。神妙な考えもいろいろ浮かんだ。だが面目まる潰れという感じのほうが強かった。家に帰っても隣近所の連中の笑いものになるだろうし、第一恥ずかしくて両親はもちろん、知合いの誰彼に会えた義理ではない、という気がした。考えてみると妙なものだと思う。こういう時には当然道理の命ずるがままに従うのが本当だろうが、人間の、いやとくに若い者の気持からすると、そんな道理とはまるでうらはらはな態度に出るのが普通なのだ。つまり、罪を犯すのは恥と思わないが、悔いるのは恥ずかしいと思うのだ。当然馬鹿者扱いされるような行動をすることは少しも恥ずかしいとは思わないが、賢い人間だとはめられる唯一つの正道へ翻然と立ち帰るのは恥ずかしいと思う、といった次第なのだ。

とにかく、こういった有様のままで、どういう手段を講じたらよいのか、どういうふうになるのか、決断もできかねて、ずるずると時間がたった。相変

らず、家にはどうしても帰りたいはなかった。そうこうしているうちに、喰い込むように心を苦しめていた懊惱も記憶がうすれていった。すると、僅かとはいえ残っていた郷里へ帰りたいという気持も消えていった。しまいに、綺麗さっぱりとそういう考えは捨ててしまった。もう一と航海してみようと思った。

父の家を私が出奔した背後にはたしかに悪い力が働いていたと思う。栄達を求めようという乱暴とも不逞ともいえる妄念に私が憑かれたのもそのためであった。そして、一たび憑かれてからはあらゆる忠告も、父の頼みも、いや命令さえも耳にはいらなかったのだ。それが何であるかはわからなかった。しかし何であれ、いま私に不運きわまる企てをもちろまさせたのも、まさにこの力にほかならなかった。私はアフリカの沿岸向けの船に乗船した。船乗りが俗にギニア航路とよんでいる航路だった。

この航海で船乗りとして乗船しなかったことはまったく大きな損失だった。もしそうしていたら、少しは苦しい目にあつたかもしれないが、それでも、水夫の任務や仕事は覚えたかもしれない。船長はともかく、航海士や副長になる資格くらいはそのうちにとれたかもしれない。しかしいつも損なほうばかりとるというのが私の運命であつたが、この場合も例外ではなかった。懐には金はあるし、身なりだつてきちんとしていたし、といったわけで、私はいつも船にのる時には紳士として振舞っていたので

ある。そんなわけで、船中で何一つ仕事はしないし、何一つ習おうともしなかったのである。

まず初めに、ロンドンでかなり立派な連中とめぐり逢つたことは有難いといえは有難いことであつた。当時の私のような、いいかげん出鱈目な若造にはそんなことはめつたにないことであつた。とかく悪魔という奴はそういう不埒な手合いには手つとり早く罠をかけるものなのだが、私の場合は違つていた。私が最初知り合つたのはちょうどギニア沿岸の航海から帰つてきていた船の船長であつた。ギニアで大儲けをしたとかで、再度の航海を思いつているところだつた。彼は、当時かなり如才なく人と応対していた私の態度が気に入つたらしく、世界が見たいという私の言葉をきいて、自分たちの船でいっしょに来るのなら船賃は無料にしてもいいといつてくれた。食事をともにし話相手になつてくれれば有難いというわけだ。持つてゆく品物があれば、取引の許す範囲でできるだけ利益もえられるようにしてやろう。はげみにもなるうということだった。

この申出でを私は早速受け入れた。正直でさっぱりしたこの船長とはすっかり仲良しになつた。こんなわけで、少しばかりの交易品を積み込んでこの船長と船出をしたわけである。私はこの商売で相当な利益を収めることができたが、それもこの仲良しの船長の誠実な好意によることと大であつた。じつは、船長の指図で私は金額にして四十ポンドの玩具や安物の雜貨類を買い

込んで持っていっていったのだ。この四十ポンドという金は親類の者に手紙を書いて、その援助をたのみ、かき集めたものだが、おそらく、親類の者も私の父か、少なくとも母を口説いてそれだけの金額を私の最初の事業に出させたものであろう。

この航海だけが、私が試みたすべての航海の中で唯一の成功した例といえよう。それというのも誠実な船長のおかげであつたことはいうまでもない。のみならず、数学の相当な知識や航海術を習ったのも、船の針路の記録をとることや天体を観測することを、つまり一人前の船乗りとしては是非知っていなければならぬいろいろなことを学んだのも、この船長のおかげであつた。船長も仕込むのに熱心であつたが、私だつて勉強するのに熱心だつた。要するに、この航海で私は一人前の船乗りとなり、一人前の貿易商人となつたわけだつた。持っていた商品の代価として五百ポンド九オンスの砂金を手に入れることができたのだが、それがなんとロンドンに帰つて売ると三百ポンド近いお金になつたのである。これで味をしめ、野心がめらめらと燃え上つた。しかしそれがやがて私の身の破滅をもたらししたのである。

とはいえ一方では、この航海で難儀な目に逢わなかつたわけではない。熱帯地方の酷暑にあつてられて激しい熱射病にかかり、いわば病気のしどおしであつた。われわれがおもに取引を行なつたのは北緯十五度から赤道までの沿岸であ

つた。

やがて私はギニア貿易商人ということになつた。船長が帰国早々亡くなつたことはたいへんな痛手であつた。しかし、もう一度同じ航海を試みようと思つた。そして前と同じ船に乗つた。前の時には航海士だつた人が今では船長としての船の指揮をとつてゐた。この航海はこんな悲惨な航海がかつてあつたらうかといひたいほどのものだつた。最近儲けた金のうち百ポンドにみたない金額を持っていたにすぎなかつた。つまり、二百ポンドを死んだ船長の寡婦に託したのだが、彼女は忠実にその責を果してくれた。それはそれでいいのだが、この航海は初めから悪運つぎで、まず最初にこういうことがあつた。カナリア諸島(アフリカの北西の群島)のほうへ、というよりこの諸島とアフリカ沿岸との中間を航行中、ある朝まだ夜も明けきらぬころ、突然サリリー(モロッコの海賊根拠地)を根城にするトルコ海賊に襲われたのである。その海賊船は帆という帆を全部張つてわれわれを追跡してきた。われわれも帆桁のゆるす限り、帆柱のゆるす限り、すべての帆を張つて逃げきろうと試みた。しかし海賊船は次第に迫つてきて、もう数時間後には追いつかれるのがはつきり目に見えた。われわれは戦う準備をした。わがほうは砲十二門、海賊のほうには十八門。午後三時ころ、かれはついに追いついた。ところがわがほうの船尾を横ぎる筈のところを誤つて船尾側を横ぎるような形で近づいてきた。われわれは持っている大砲のうち

八門をそちら側に向け、片舷斉射のお見舞いをした。かれも応戦し、乗組みの二百人近い連中も小銃をいっせいにうつつてきたが、すぐ針路を反転して離れていった。こちらは全員物蔭に隠れていたのが無事であつた。かれは再び攻撃にうつり、わがほうも応戦の態勢を整えた。が、こんどは反対側の船尾側に船をのりつけ、六十人もの海賊がこちらの甲板に殺到してきた。そして甲板や索具などをたちまちずたずたに切りはじめた。わがほうもまた小銃や短槍や爆薬その他で防戦につとめ、二度までも敵を甲板から撃退した。しかし、こんな陰惨な話はいいかげんで切り上げたいので簡単にするが、結局わがほうの船は航行不能に陥り、三人が殺され、八人重傷、ということになり、やむをえずついに降伏した。全員捕虜としてサリリーに連れてゆかれた。ムーア人の港である。

私がそこで受けた扱いは、初め心配していたほどひどいものではなかつた。他の連中のように皇帝の宮廷に引っぱつてもいかなかつた。そのかわり海賊の船長個人の戦利品として奴隷にされてしまつた。まだ若いし、敏捷だし、船長の用事にはもつてこいといふのであつた。貿易商人から一転して哀れな奴隷へ、といふこの驚くべき境遇の変化には、私自身まったく呆然としてしまつた。そのうち、きつと、ひどい目にあうぞ、そうなつたら誰も助け手はなくなるぞ、といった父の予言が思いだされた。最悪の事態というか、とにかく父の予言は見事に適中



したと私は考えざるをえなかった。摂理の御手がのびたのだ、もう救われる見込みはないのだと思つた。ところが、これも私が、このちかめなければならなかった悲惨な運命に比べればもの数でもなかったのだ。それはこの物語が進むにつれて次第に明らかになるう。

新しい保護者、つまり主人だが、これが私を家につれていった。こんど彼が航海に出る時には私をつれていってくれるかもしれない、そのうちには彼の運もつきてスペインかポルトガルの軍艦に捕えられる、そうすると自分も自由の身になれる、という望みを私はいだいた。こういう希望はすぐにすつ飛んでしまった。彼が海に出かける時にはいつも私は陸上に残され、小さな庭の手入れや、奴隷がよくする家事のつまらないことをさせられたりするのがおちだった。主人が獲物探しから帰つてくると、こんどは船の後始末のために彼の船室に泊まらされる有様だった。

もう逃亡のことだけしか考えなかった。うまく逃げ了るにはどんな方法がよいか、としぎりに考えるのだったが、そのめどが見つからなかった。いろいろ考へてはみるのだが、正気の沙汰とは思えないものばかりだった。いっしょに逃げようという、ともに秘密を打ち明けて相談できる人間が一人もいなかった。一人の奴隷仲間も、つまりイギリス人にしろアイルランド人にしろスコットランド人にしろ相談相手が一人もいなかったのだ。逃亡の日を幻に描いてわ

れとわが身を慰めることもしばしばだったが、実際にそれを実行する見込みは絶無に近く、かくて二年という月日がたった。

およそ二年ののち、あるちよつとした妙な出来事がおこつて、そのためまたもや何とか逃げ出して自由な身になりたいという考えが頭をもたげた。それは主人がいつもより永く家にいた時のことだが、彼はなんでも金がないとかで、別に船の装備をとのえるでもなく、家にごろしてしていた。週に一、二回、それも天気さえよければもつと頻繁に、船の小艇を港外に漕ぎ出して釣りをして生活していた。小艇を漕ぐのはいつもお伴を仰せつかる私ともう一人の、若いマレスコ(本来はスペインにいたムリア人をさして)であった。われわれ二人がお伴をすると彼はいつも上機嫌であつた。私は私で釣の名人ぶりを発揮した。そういうわけで、私は主人の親戚の一人であるムリア人と、マレスコと呼ばれていた少年といっしょにご馳走の魚をとりに沖にだされることもしばしばであつた。

ある時、こういふことがあつた。死んだように風いだ朝、魚を釣りに出かけたところ、霧が深くたちこめ、陸地から半リーグ(約三マイル)も沖に出ていないのに、陸地を見失つてしまった。いったいどっちへむかっているのか皆目見当がつかないまま、まる一日、そしてまる一と晩懸命に漕いだ。翌朝になつてみると、陸地のほうへ漕ぎ入れているどころか逆に沖にむかつて漕ぎ出していることがわかつた。陸地から少なく

とも二リーグは沖合に出ていた。しかし、とにかく無事に帰ることができた。帰るに当たつてもたいへんな難儀と相当な危険をおかしたことはもちろんである。なにしろその朝、かなり強い風が吹きはじめたからだ。しかし、何よりもわれわれが苦しんだことはひどく腹がすいていたことだった。

主人はこの事故にこりて将来万一のことがあつてはと心配して用心深くなつた。以前に彼がわれわれから拿捕したイギリス船の大形ボートが自由に使えたので、これに羅針盤と多少の食糧をつみこむのでなければ二度と釣りに出かけるくなつた。早速、船の木工、といつても私同様、イギリス人の奴隷なのだが、これに命じてこの大形ボートの中央に小さな特別室、つまり船室を作らせた。何のことはない、屋形船にあるのと殆んど変りのないものだった。その船室の後ろには人がたつて舵を取つたり、主帆の帆脚索をたぐつたりする余地があり、その前には乗組員の一人や二人は楽にたつて帆を操ることができるようになつていた。この大形ボートにはしる時にはいわゆる三角帆ではしつた。帆のブームは船室のすぐ上を左右に自由自在にうごいた。船室は、したがって、ちよつと外からは見えないうら低く作られており、主人のほか一、二名の奴隷が横になつて寝られるくらいに余裕があつた。食卓も備えてあり、折にふれて主人が好んで飲む各種の酒の壺をいれる小さな戸棚もあつた。パン、米、コーヒールがその